

二〇〇八年度 東北大学前期試験 国語解答 解説及び配点予想

ここでは国語を100点満点で考えています。学部学科によって満点が異なることも考えられますが、配点のポイントは共通であると考えられます。

一 【現代文】

【解答例】

- 問一 (1) 回収 (2) 予見 (3) 等価 (4) 還元 (5) 融合

問二 (a) 過去のことを打ち捨てて顧みないこと。

(b) 将来のことはわからないから、くよくよしてもしょうがないということ。

問三 時間を、現在という部分からのみ見るのではなく、過去や未来の出来事の関係の全体像としてとらえること。(四十九字)

問四 日本における個人が、世界全体よりも、様々な大きさの、多くの異なる集団の領域を自分の居場所として感じていること。(五十五字)

問五 日本人の、時間において過去や未来と切り離された現在のみを重視し、また空間的にも、自分が所属している様々な部分的集団を通して、世界の全体を見ようとするという傾向。(八十字)

【配点予想】(二十点)

問一 各一点

問二 各二点。ニュアンスが出ていれば可。

問三 六点 ポイント二カ所

- a 時間を現在だけに限定しない …… 二点
 b (aを) 過去から未来への出来事全体の関係でとらえる …… 二点
 aのみでは不可。

問四 六点 ポイント三カ所

- a 日本人は全体よりも部分から世界を見る …… 二点
 b (部分は) 様々なサイズがある …… 二点
 c (また部分には) 様々な次元のものがあり、同時に所属できる …… 二点
 aのみでは不可。

問五 九点 ポイント三カ所

- a 日本人は部分から全体を見ようとする …… 二点
 b 時間的には過去・未来から現在だけを切り離してみる …… 四点
 c 空間的には自分の所属する集団の中から世界を見ようとする …… 四点

【解説(総合)】

やや例年に比べ、設問に対する該当箇所が見つつけやすく、難易度が下がったと言える。個々の設問の指定に忠実に答えていけば、まずまずの得点が期待できよう。

【解説(設問ごと)】

問一 漢字問題。標準的なものである。

問二 慣用句の意味を問う問題。過去にもしばしば出題されている。

問三 傍線部の近くの言い換えでよい。ただし「時間の受け取り方」を問われているのだから、答えはそれにあった形になるのがよい。

問四 傍線直後が言い換え。「伸縮」と「重層」を両方とも説明すること。

問五 設問に「本文全体の趣旨」とあるのだから、ここまでの設問を過不足なくまとめればよい。具体的には(三)での「時間」と(四)での「空間」の両方を盛り込めばよい。東北大の典型問題。

二 現代文】

【解答例】

問一 入れ札により乾児の中で年頭である自分に信望がないことが表れそうだという嫌な予感。(四十文字)

問二 入れ札で自分が選ばれないことへの不快と、あと一票で選ばれるという期待の中で、後輩の浅太郎の無礼さに競争心を感じ、自分で自分に投票してしまおうかと思いい悩む心情。(七十九文字)

問三 後輩への競争心から自分の名を書いてしまった札が読みあげられたことへの羞恥心。

問四 入れ札の筆跡を調べられることで、自分の名を書いたという九郎助の不正が、皆に知られてしまうことへの恐れがなくなったから。(五十九文字)

問五 後輩への嫉妬心から、親分である忠治の日頃の教えに背いてまで、入れ札で卑怯なことをした自分への悔恨を感じているということ。(六十文字)

【配点予想】(二十点)

問一 五点 ポイント三カ所

- | | | | |
|---|------------------------|----|----|
| a | 自分は乾児たちの中で年かさだが信望がない | …… | 一点 |
| b | (a)であることが入れ札で明らかになりそつだ | …… | 一点 |
| c | (a・b)であることへの不快感 | …… | 一点 |

問二 九点 ポイント四カ所

- | | | | |
|---|------------------------------------|----|----|
| a | 自分に信望がないことへの焦り | …… | 一点 |
| b | 弥助以外の票が入れば自分も供に選ばれるのではないかという期待 | …… | 一点 |
| c | 後輩なのに自分より信望を集める浅太郎が自分を目下扱いすることへの怒り | …… | 一点 |
| d | (a・b・c)よりも自分の名を札に書いてしまおうかと思いい悩む | …… | 三点 |

問三 四点 ポイント二カ所

- a 後輩への競争心から入れ札に自分の名を書いた …… 二点
 b その札が読みあげられたことによる羞恥心 …… 二点
 aのみでは不可。

問四 六点 ポイント三カ所

- a 後輩への競争心から入れ札で不正をした …… 二点
 b aが露見することへの不安 …… 二点
 c 誰も札を調べなかったことへの安堵 …… 二点

問五 六点 ポイント三カ所

- a 自分に信望がないため後輩に嫉妬した …… 二点
 b 忠治は普段から「卑怯なまねをするな」と教えていた …… 二点
 c (aの故に) bに背いて入れ札で不正をしたことへの悔恨 …… 二点

【解説(総合)】

ここ数年、東北大の小説の問題文はやや「文学的」で読み取りにくいものが多かったが、本年度の菊池寛などは、どちらかという中間小説的な要素が強いため、読解は比較的容易。あらかじめ全体の解答の方向性を考えておくことと個々の答案がたてやすい。

【解説(設問ごと)】

問一 直前の心情をまとめればよい。以後の問いのヒントも出ている。

問二 設問の「九郎助の一連の気持ちの動きをふまえて」とあるのに注意。傍線近くだけでなく、前の設問からの「流れ」でまとめるということである。

問三 「顔から火が出る」は「恥ずかしい」という意味の慣用表現。従って、このニュアンスを必ず説明すること。

問四 直前に「誰も調べて見ようとはしなかった」とある。これがヒント。

問五 全体のまとめを考えれば方向は出てくる。「浅ましき」の説明なのだから、「ここまでの「後輩への嫉妬」「入れ札での不正」を書けばよい。さらに、直前「忠治と別れる時」をふまえ、親分との関係を説明すればよい。

三 国文

【解答例】

問一 べし

問二 (1) 近習としての仕事に休暇を与える

(2) あれこれ考えてそのままにしている

問三 罪人の処罰を厳正に行ったことで忠義を尽くす一方、務めを果たすと直ちに出家したことで不孝を償った行為。(五十字)

問四 出奔した罪人を探させるにあたって、当人の子を選び、しかも尋ねよとしか命じていないこと。(四十三字)

問五 罪人の父とはいえ、切腹させ首を切ったことは最大の不孝だから。(三十字)

【配点予想】(二十点)

問一 一点

問二 各二点

- | | | |
|----------------|----|----|
| 1. 「い」と「ま」 | …… | 一点 |
| 「と」 | …… | 一点 |
| 2. 「とかく」と「もだす」 | …… | 一点 |
| 「とかく」と「もだす」 | …… | 一点 |

問三 六点

・ 忠の内容 …… 二点

・孝の内容 ……二点

問四 五点

・罪人の捜索にその子を選んだこと ……二点
 ・主命の内容が「尋ねよ」ということだけだったこと ……二点

問五 四点

・罪人の父に切腹させ首を切ったこと ……二点
 ・父殺しは不孝であること ……二点

【解説】

問一 基本。

問二 (1)は「本文の内容に即して」とあるので、何の「いとま」か補ってもよい。(2)は、やや難。

問三 「忠」「孝」それぞれの行為を、直前の文を手がかりにして具体的にまとめる。特に主君に対する忠義とは、この場合どんなことを明らかにする。

問四 第二段落の冒頭の二文に着目して、罪人の捜索に、他人でなくその子を選んだことが指摘できれば合格点。こここの第一文を直訳しても解答になり得る。さらに、解答例のように、主命の真意を汲んで補足することも考えられる。

問五 直前と最後の文から、父殺しが不孝であることを非難していると考えられる。

四 漢文

【解答例】

問一 (1) ゆえん(を) (2) もって

問二 (ア) まさにいきよせんとするにおよび、つまのいえあたえず、

(イ) ついにさゆうをしてぎゆうしゅをばくせしめ、

問三 あなたのところには元々役人がいるのに、どうして私のところまでやってきたのか。

問四 自分たちも牛泥棒の一味だと疑われることを恐れたから。(二十五字)

問五 自分たちが解決できずにいた牛の所有の問題を、隣県の令である張允済が機転を用いてただちに解決したから。(五十字)

【配点予想】(二十点)

問一 各一点

問二 各二点 ポイント以下の通り。

ア a まさにいきよせんとするにおよび、 …… 一点

b つまのいえあたえず …… 一点

イ 解答通り。下句との接続のない場合一点減。

問三 四点 ポイント二カ所

a お前のところには(担当の)県令がいる …… 一点

b どうして私のところまでやってきたのか …… 一点

aのみでは不可。

問四 四点 ポイント二カ所

- a 牛泥棒の一味にされるかもしれない …… 一点
 b (aだと)思われることが心配だ …… 一点
 末尾が「くから」となっていない場合一点減。

問五 六点 ポイント三カ所

- a 牛の所有問題を元武県では解決できずにいた …… 一点
 b 張允済は隣県の令 …… 一点
 c (bが)速やかに解決してしまった …… 一点

【解説(総合)】

本文の長さ、難易度ともに標準的であり、基本構文、全体の読解がバランスよく出題されている点、例年と共通する。ただし、後半部分は、話が急展開を見せるので、一文ことつながりを丁寧に読み取らないと答えにくい。

【解説(設問ごと)】

問一 語句の読み。「将」はこの場合再読文字「まさに」とすではなく、「もって」。直前に「以」があることに対する重複を避けた表現と見るのが穏当であろう。「ひきいて」と読むことも不可能ではないが(男たちを引き連れて、の意味になる)、それだと直後に述語「詣」があるのとニュアンスが重複する。それに、いずれにせよ「もって」の読みは「ひきいて」の意味を含んでいるのだから、無理に限定的に読む必要はないと思われる。

問二 アの「将」が再読文字。後半は「妻の家」が主語になる。イは典型的な使役構文。

問三 「爾」は主語として働いており、「なんじ」「。」「令」はここでは官職を示す。「解釈」ではないが、ある程度言葉を補わないと訳にならない。

問四 傍線部の理由を問われているので、直前の文脈を丁寧にとろう。

問五 ここまで全体の内容をまとめれば答えが出る。東北大の漢文としては典型的な問いである。

【現代語訳】

張允済は、青州の北海の人である。隋の大業年間に、武陽県の令となり、徳教によって下々を教化し、人々が懐いていた。元武県は武陽県と隣接していたが、(そこに住む)ある人が、雌牛をその妻の家から借りて、八、九年して、雌牛が子供を生んで十頭あまりに増えた。(ところが妻と)別居しようとしたら、妻の家では(男が育てた牛を男に)与えなかった。(元武)県の役人は、長官が何人が交代する間、所有を決めることができなかった。(そこでとうとう)その男が武陽県にやってきて、允済に訴えると、允済は、「お前のところには担当の県令がおるのに、なぜ(隣県の令である)私のところにやってきたのか」といった。男は涙を止めどなく流し、詳しく訳を述べた。允済はすると部下に命じて男を縛り上げさせ、上着で顔を覆って、妻の家のある村に行き、「牛泥棒をとらえたぞ」といい、村中の牛を集めさせて、それぞれの出所を答えさせた。妻の家では、訳がわからずに、泥棒の一味にされることをおそれ、訴訟ことになっている牛を指差して「これは娘婿の家の牛です。我々は知りません」と答えた。允済はそこで隠れていた男の顔をあらわして、妻の家の人々に「これが娘婿なのだから、この牛は彼に戻すのがよしい」と言った。妻の家の者は叩頭して罪を認めた。元武県の役人たちはこれを聞いて、皆大いに恥じ入った。